

《書 評》

塚本恭章『経済学の冒険』

西 孝

塚本恭章『経済学の冒険 — ブックレビュー & ガイド 100 —』
読書人、2023年

本書は、愛知大学の塚本恭章氏（以下、「著者」と言及し、私（西）に対しては「筆者」と言及する）による書評を中心に編まれた著作である。15年近くにわたって「週刊読書人」に書評を書いてきた著者が、さまざまな一般誌、学術誌で公表してきた文章をベースに構成されている。本のサブタイトルは、60冊の書評と40冊のブックガイドを含んでいることを反映している。加えて、巻末には各書評に登場する80人近い経済学者についてのガイドが付されており、さらにその人物ガイドを作成するに当たって参照された文献一覧も紹介されているという念の入れようである。

また、きわめてユニークな試みとして、各章末には書評に対する当該著作の著者本人からのリアクションが併せて収録されている。ともすれば、一方的に「言いつ放し」になってしまいかねない無責任なユーザーレビューとは異なり、双方向的な活きた言論としての書評であることを可能にしている。

著者の書評とブックガイドは、200字程度のものから4000字超規模のものまでさまざまであるが、全体では650ページを超える大部な著書となっている。他方で、辞典としての性格を併せもっていることを考えれば、相応の大きさであるともいえるだろう。

ブックガイドを除いた書評部分は、そのテーマ別に4部構成になっている。

第1章は「市場と貨幣」と題されており、現代における主流派経済学である新古典派経済学が多分に等閑視してきた貨幣の問題を、市場メカニズムの理解との関連で論じた著作が取り上げられている。

第2章は「資本主義と社会主義」となっている。そこで取り上げられるのは、一部で暴走の兆候を示しているグローバル資本主義の再検討という視点をもった著作であり、また社会主義計画経済体制の崩壊とともにあらためて検討されるべき資本主義の未来像という視点をもった著作群である。

第1章と第2章は、併せて「資本主義論」それ自体であるともいえる。市場と貨幣は、それ自体が資本主義の本質を形成するものであり、社会主義との対比もまた、多くの場合、それは「社会主義論」であるよりは「資本主義論」である。そしてそれらはいずれも経済学において（あえて今の経済学会においてとは言わないが）、今も昔もその本質的重要性をもち続けているテーマである。

筆者の考えるところによれば、ソヴィエト連邦や東欧社会主義体制の崩壊において人々は、社会主義に対して資本主義を選好したわけではない。独裁的統制による中央計画経済システムに対して、より自由なシステムを選んだに過ぎない。それは言葉の本来の意味における社会主義の失敗や、社会主義に対する資本主義の勝利なるものを何ら実証してはいないのである。

そもそも社会主義が失敗したとされる証とは、1990年代に社会主義計画経済体制が崩壊したことである。社会主義計画経済体制は人為的に構成されたシステムであり、ある特定の政権や政党の崩壊と軌を一にして崩壊しうるものであった。しかし資本主義はそのように人為的に構成されたシステムではないので、ある特定の政権・政党が否定されたとしても、起こることは政権の交代であるに過ぎない。人為的に構成されたものは崩壊しうるが、自然に構成されたものは、むしろ人為的な力（革命）に依ってしか崩壊させることができない—ただし、例外はゼロではない—というにすぎないのではないだろうか。しかし、そのパフォーマンスで評価するなら、恐慌、経済危機、貧困・格差等々、純粋な資本主義はすでに十分に失敗しているともいえるの

である。

続く第3章は「経済思想と経済学説」、第4章は「人間社会と自伝・評伝」となっており、いずれも、いわば「経済学」という学問のあり方を巡る著作、およびそれを考察するのに資すると思われる自伝・評伝が取り上げられている。

昨今の大学における経済学関連の授業ではついでお目にかからないような、いわゆる反主流派、異端派の経済学に接し、それを概観することができるのは本書の大きな魅力の一つである。なぜなら、筆者が考えるに主流派の経済学とは科学的な実証・反証を通じて正しいことが証明された客観的普遍性を有する理論ではないからである。

経済学においては、自然科学におけると同様な意味での制御された実験を行うことはできない。昨今、どれほどの実証的研究が学会において優勢になっていようとも、それは対立する政策や経済理念に白黒をつけるだけの決定力をもつことは叶わないのである。いや、自然科学においてさえ、その能力は限定されていると考えるべきであるが、社会科学である経済学においてはなおさらであると言わねばならない。実際、経済学において、対立する政策理念に何ら決着がつかず、しかも同様な内容を巡る論争が形を変えて再現することがしばしばあるのは、それを反映していると考えることができる。

そうであるとすれば、「主流派の経済学」とはなんだろうか？それが主流派として残った経緯については、ここで論じることはできないが、少なくともそれは、さまざまに対立するそれ以外の経済学説に対して、客観的な決着をつけたうえで今日残っているわけでは決してないことを認めないわけにはいかないのである。そうであれば、「異端」「反主流」などと呼ばれている経済学説は、間違っているがゆえに、あるいは有用性に欠けるがゆえに「異端」や「反主流」であるのではないことになる。それらは科学的実証以外の何らかの力学によって、結果として無視・等閑視されるに至ったに過ぎず、むしろそれらにも、十分な存在意義があることが認められなければならない。そしてそれらをあえて傍流に押しやってきたことが、今日の経済学の無力化

を招いている要因であるとさえ筆者は考えている。

本書では、総じて、個人の自由と市場の調整メカニズムを至上の価値と考える政策理念——いわゆる新自由主義——や、主流とされる新古典派経済学への懐疑的・批判的論考が多く取り上げられているように思われる。それはまた著者の問題意識でもあるのだろう。

たしかにここで取り上げられている本の少なからぬものは、筆者もまたかつてそこから多くの洞察を得て、そしてそれ以上に、それらを通じて経済学を研究する知的好奇心を大きく刺激された経験のあるものである。勉強に留まらなただけでなく、何より楽しかった。著者がそのような知的興奮と刺激を読者に与えたいと望んでいるのがよく伝わってくる。

また、筆者があえて「ブックレビュー」よりも「書評」という言葉を使いたくなるのは、著者が単に本の中身を紹介することを超えて、むしろその本質や意義を評価するという姿勢を一貫して有しているからである。さまざまな著作は、貨幣論、資本主義論、経済学の危機といったより大きな文脈・テーマのなかに位置づけられ、評されている。それを読むことで、読者は当該著作の内容だけでなく、それが位置づけられる背景・テーマについても触れることができるだろう。

さまざま経済学書に対する一人の著者の書評が集まって、1冊の本になっているということは、さまざまな著者による書評の集まりとは異なる。それは個々の書評の集まりであることを超えて、ひとつの構成的統一を形成している。それは経済学的論考に対するひとつの「メタ」を形成しているように思える。いわば、経済現象に関する論考そのものに対する論考であり、自ずとより高い抽象レベルでの哲学的考察となる。

書籍というものは、経済理論にいう「情報の非対称性」の典型的ケースである。つまりその書籍を供給する側（著者や出版社）とそれを需要する側（読者）は、その書籍の内容について事前にもっている情報が著しく異なっている。通常、読者は、目の前の書籍が代金を支払って読むに値するものであるか否かを事前には知ることができない。その状況をそのまま放置すると、不確

実性下において、読者は良書に対して相応の対価を進んで支払えない可能性があり、良書の市場が消滅するという、いわゆる「逆選択」が生じうるのである。

そのような情報の非対称性を軽減するために書評が重要な役割を果たすことは言うまでもない。しかし、それだけではなく、通常、書籍における情報の非対称性を補っているのは、著者の知名度であったり、ときに無責任なユーザーレビューであったり、「発売以来〇〇万部突破」といった宣伝文句であったりする。

そしてそれらは必ずしも書籍の良し悪しを適切に反映したものであるとは限らず、「売れる本はますます売れる」、「売れた本を書いた人の本はますます売れる」という「バンドワゴン効果」を生じさせることがしばしばある。

出版業界における不振とは、デジタルの台頭や若者を中心に人々が本を読まなくなっているといった要因によって引き起こされているだけではない。情報の非対称性によって学術的な良書の市場が低迷し、書籍における悪書が良書を駆逐するような「グレシャムの法則」が蔓延する傾向にも、その一端があると考えられるのである。それゆえ、それを回避し、良書の市場を適切に維持するために適切な書評が果たす役割は計り知れないのである。

いわゆる自然科学分野と異なり、実験室における実験や臨床研究の余地が限定されている社会科学においては、研究をするという行為の中で書籍や論文を「読む」という作業の占めるウェイトは相対的に大きい。そうであるとすれば、書評という行為は、社会科学における学術研究の中で特別な重要性をもつはずである。本書はそのことを、そしてその一つの可能なあり方をわれわれに教えてくれている。

最後に、2016年から2022年までの分が本書に収められた年末回顧号「経済学」の文章も有意義である。その年その年をこのような形で振り返ることは、学術的な価値を超えて深い趣きがあるように思われる。ぜひ今後も続けてもらえたらと思う。